



櫻齋房種画

岡本勘造綴

嶋田一郎梅雨日記

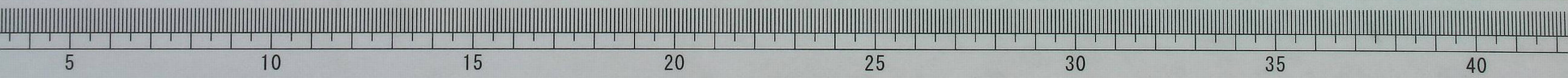
芳川俊雄閱

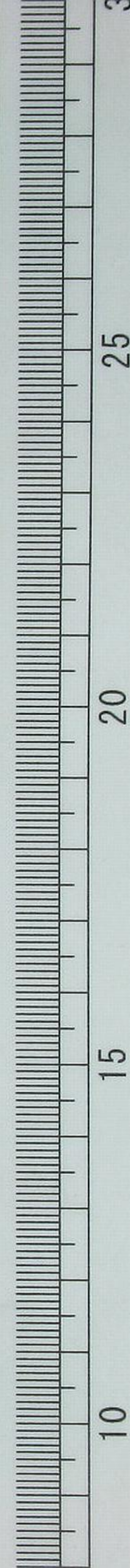
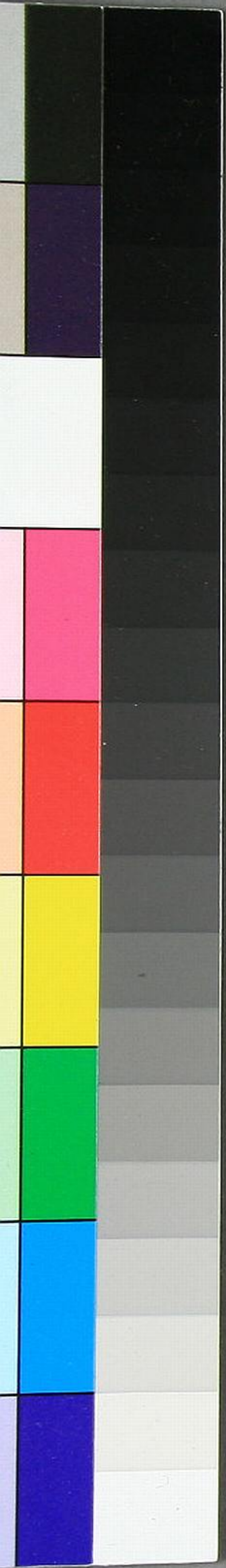
島鮮堂書梓

初編下

初編中

初編上





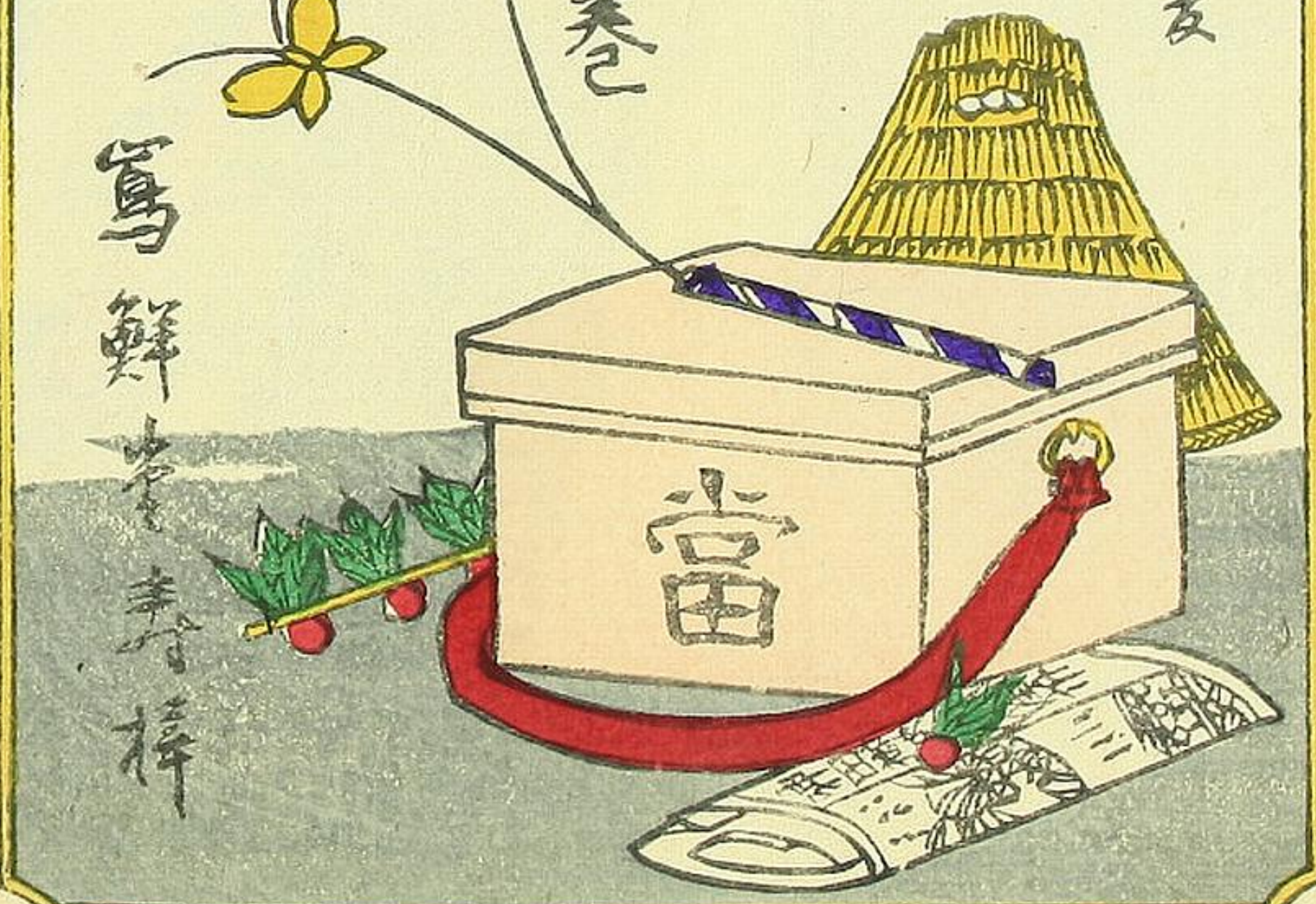
島田一郎

梅雨日記

初編 上の巻

芳川俊雄
因本勤造
櫻齋房種畫

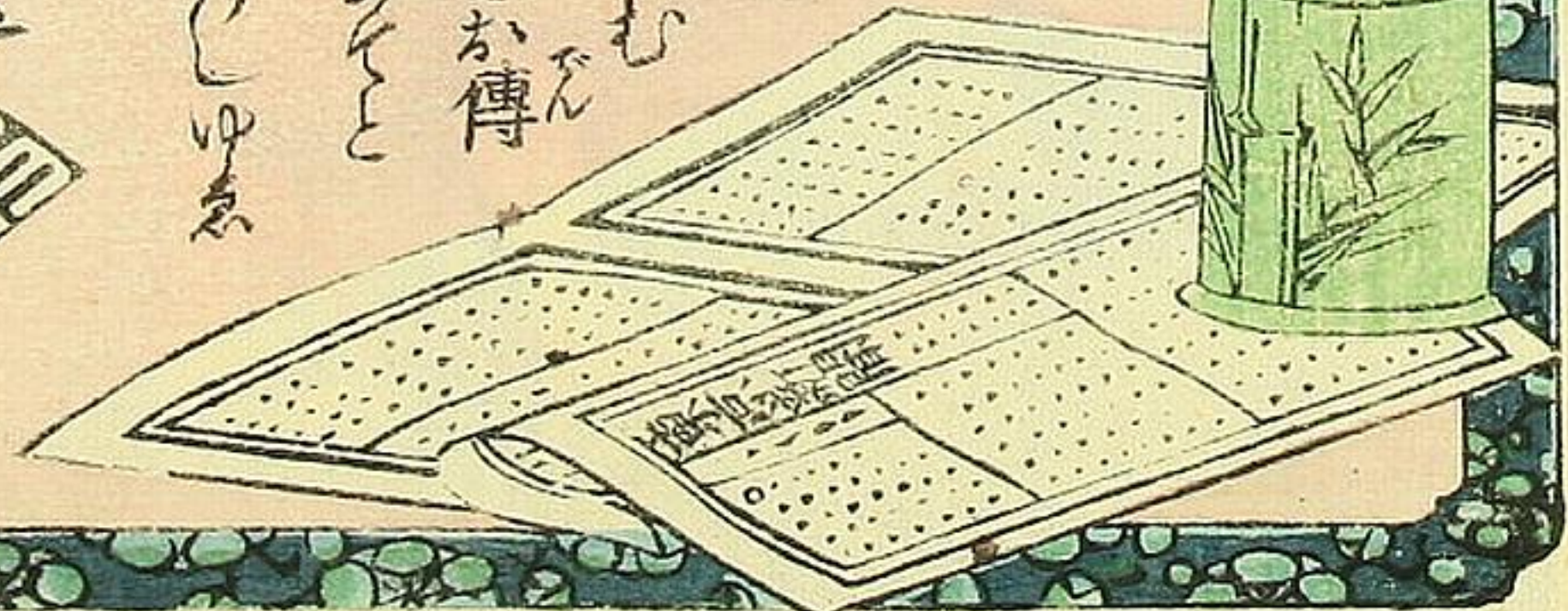
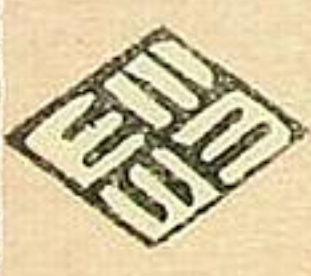
寫鮮堂春梓



此頃梅霖に徒然たるまき社負
起泉子と共に古き新聞紙を撰分んと
取散したる其中に一際目なる島田の筋を
束ねて見よか婀娜めある加賀小因は梅吉の
携るぬ貞操と假元結かきあつてゐる乱髪同志と
共小一郎が其身をのりある響のうきを爰に怪む
折の島鮮堂の主人が訪来て此程漸々結あげて傳
の髪乃油手序に其島田を以當時の流行小結のあつて
強ては頼も起泉子が再び手袷といふやどる変やとなりしゆ
是非あつて又小子が僻直一の役を勤めませす

明治十二年六月上旬
東京新聞社におき

芳川春濤題





島日市



湯島の藝妓
梅吉

一郎の父
島田重兵衛



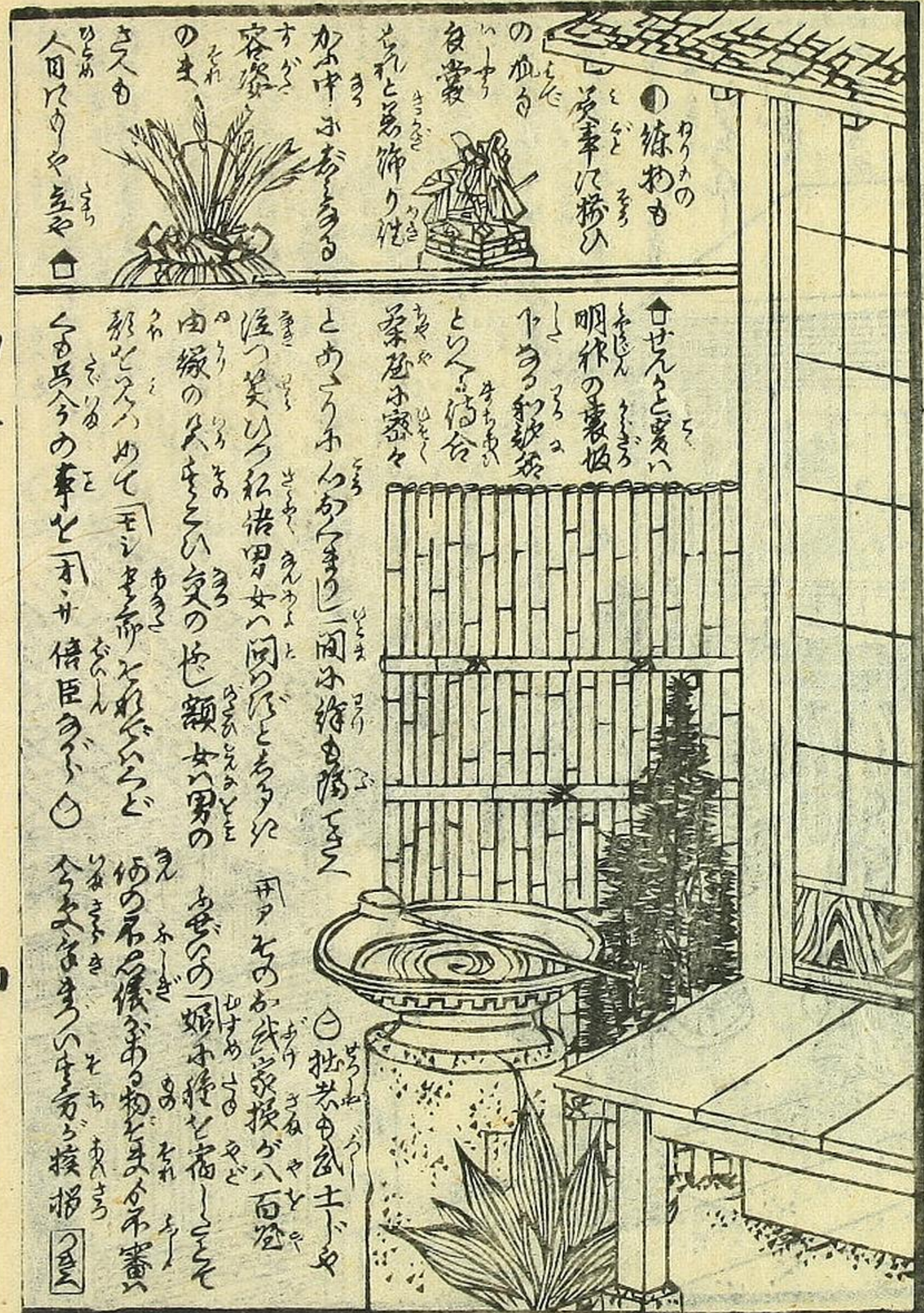
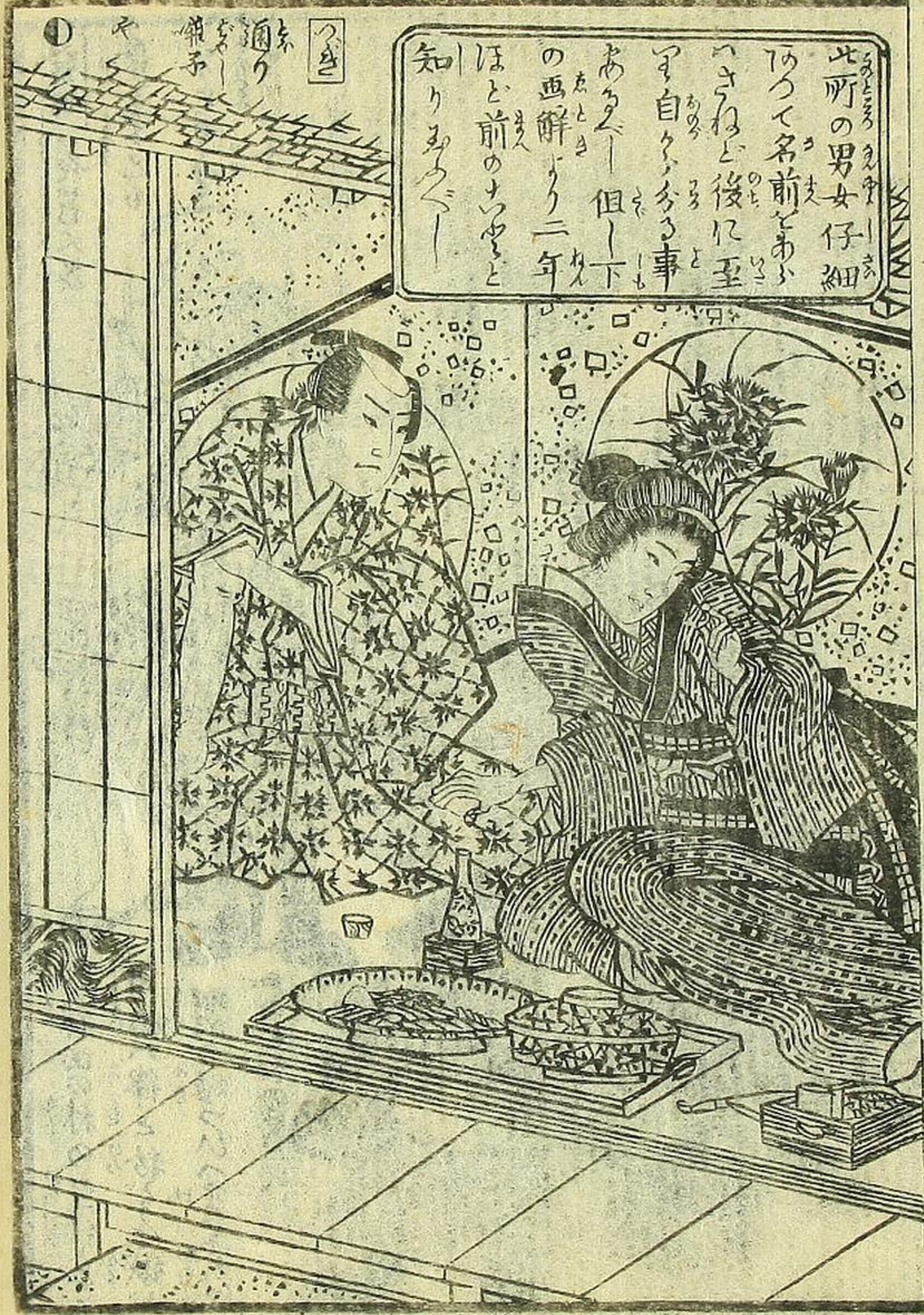
發端 花若大君

衆と祭事も
 方と逆する
 生れと今
 まくまふ凶神悪魔
 引の車のくくと世も
 地老のしるが如く憂る
 毎不神夢るまも哀
 幸が後の間と過一箇
 もあのがとりのけり
 葉月中つこ
 今日明日を
 亦あある

× 林田の林の繁れとて
 市街の神と結ぶと織が
 如泥の雄つひへまふ天に
 戸のちのちの次へ

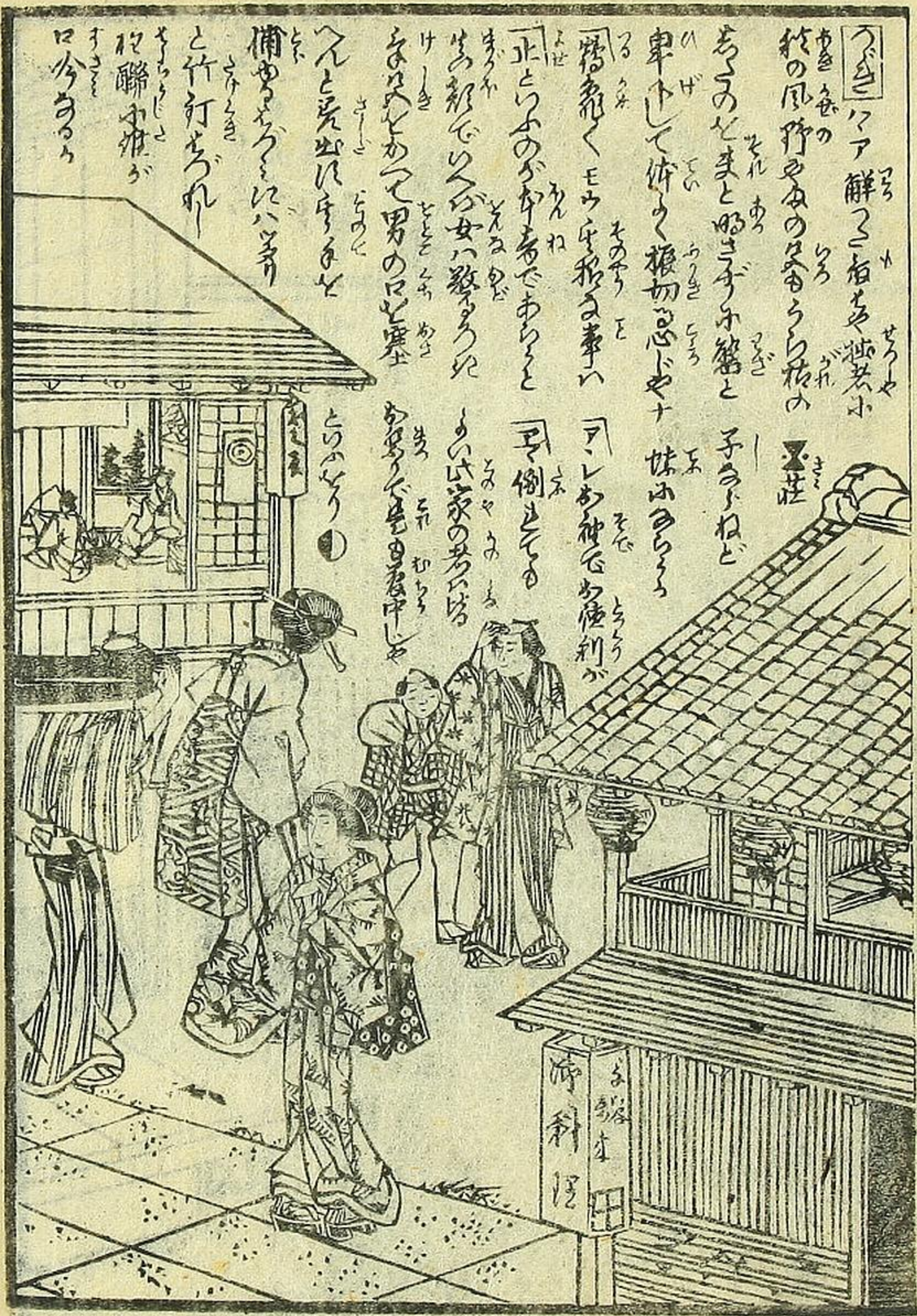
富

此所の男女仔細
あつて名前とあつ
べきねと後に至
る自々多事
あつて一但下
の画解より二年
ほと前のつと
知りあふ



ゆりもの
飾り物も
豪華に飾ひ
のわろ
後装
それとあつたり
加中ふおさる
容姿
のま
さるも
人用りのやま

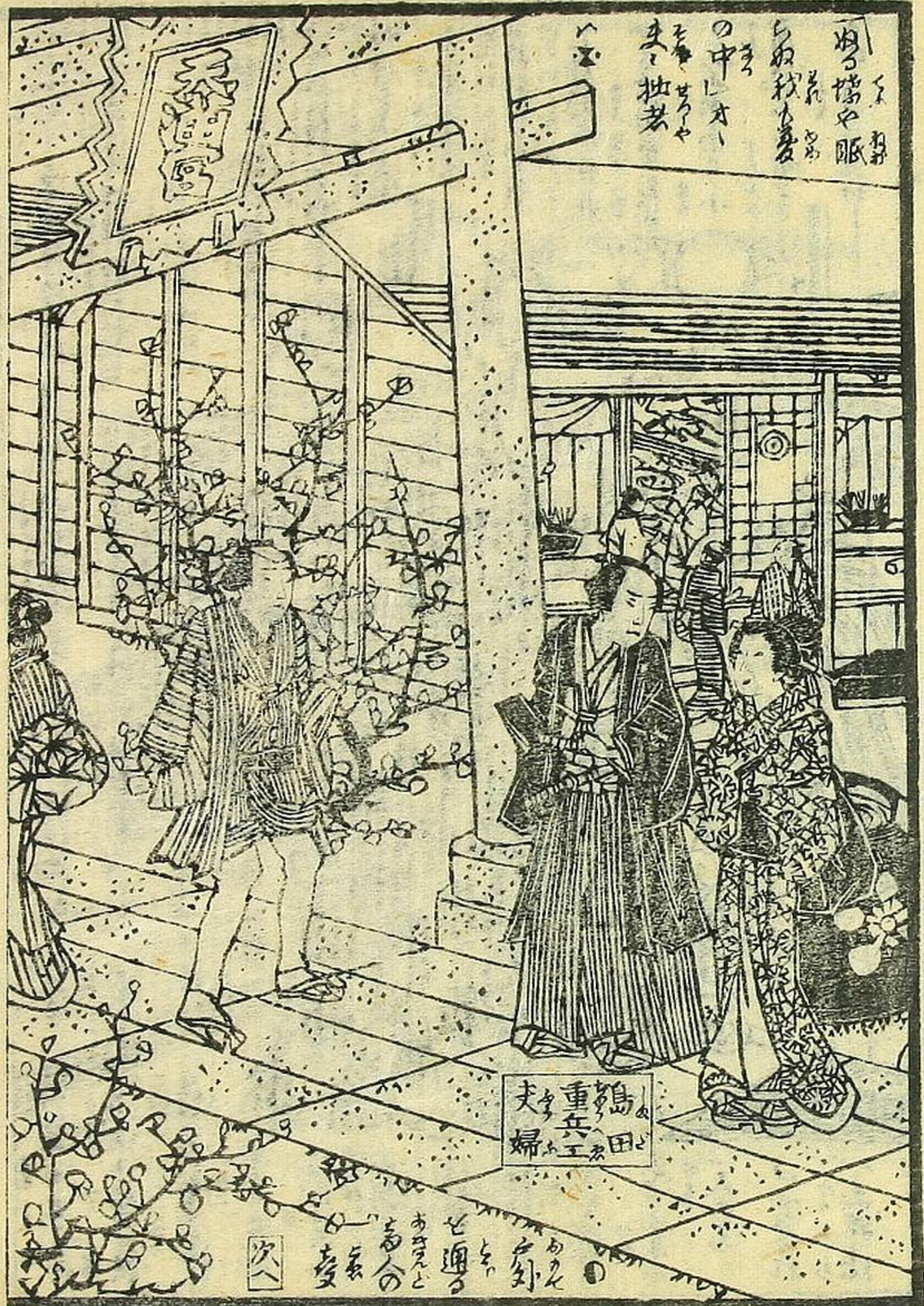
合せのま
明林の裏板
下ろつた
とらん
柔
とあつたり
後つ笑ひ
由縁の
終つて
今更今の事



ついでア解つて宿を過ぎ
杖の風行ぬぬの足音うらたの
あつたまとはまきずみ盤と
車下して倚りて根切心と
「根切心」エ
「正」といふのがやまをわらうと
まはれをひらぬ女ハ怒るゆゑ
まはれをひらぬ男の口と塞
「正」といふのがやまをわらうと
まはれをひらぬ女ハ怒るゆゑ
まはれをひらぬ男の口と塞

備ゆるをうゝにハ等
と竹打ぢぢれ
口今あらん

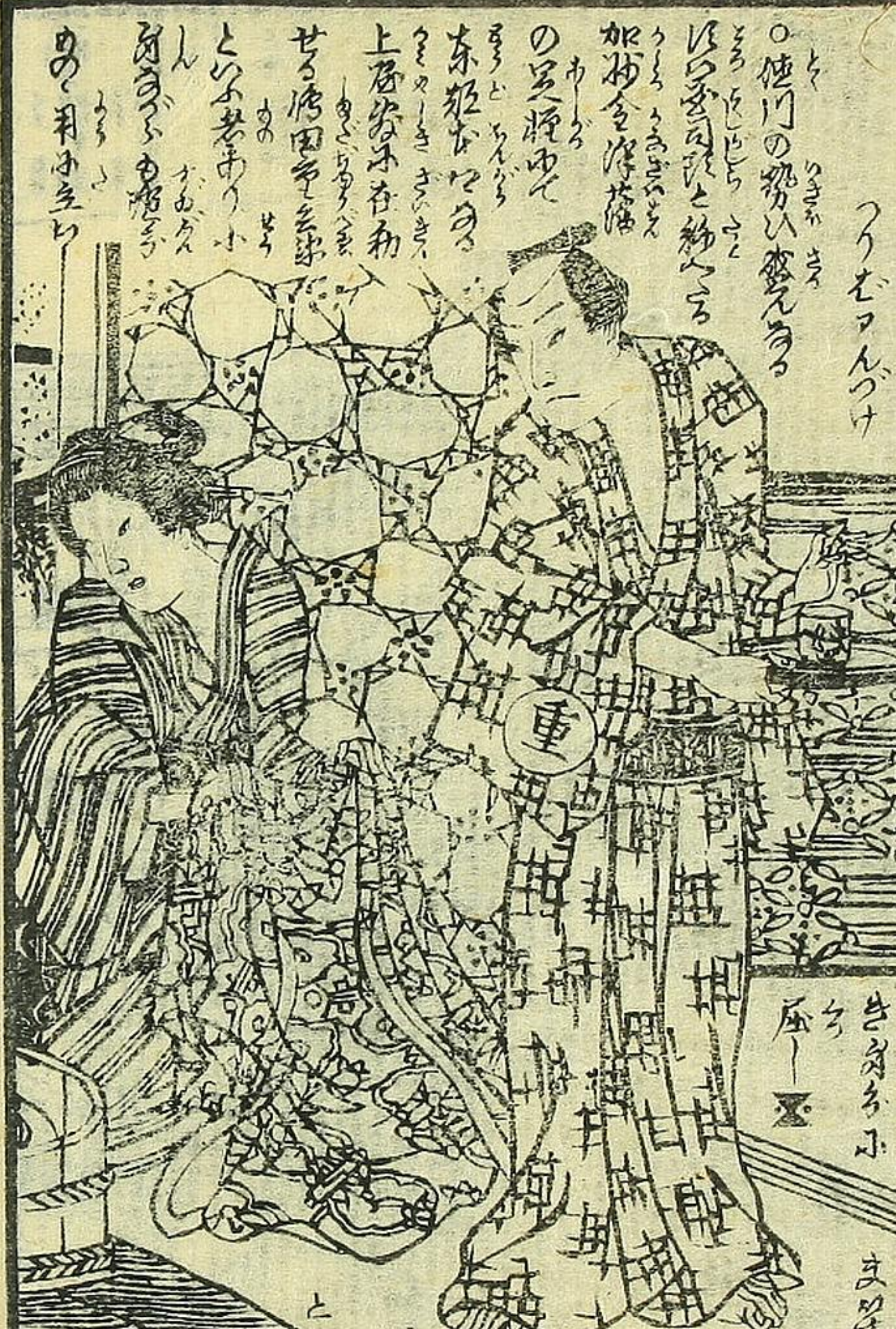
羽の端や眼
らぬ秋も夏
の中しオ
ま、拙者
ハ玉



重鶴 田
重兵衛
夫婦

次
島田新上

つぎに、この世の業の重く、あれほど、時休後、
れ書付、その神梅、あま、
ついで、ついで、ついで、
〇徳門の勢い盛んなる、
はら、はら、はら、
加勢、加勢、加勢、
の、の、の、
東、東、東、
上、上、上、
昔、昔、昔、
と、と、と、
の、の、の、



〇万葉不
自由、自由、自由、
ま、ま、ま、
も、も、も、
ね、ね、ね、
月、月、月、
の、の、の、
と、と、と、
一、一、一、
ご、ご、ご、
ハ、ハ、ハ、

ついで、ついで、ついで、
〇徳門の勢い盛んなる、
はら、はら、はら、
加勢、加勢、加勢、
の、の、の、
東、東、東、
上、上、上、
昔、昔、昔、
と、と、と、
の、の、の、



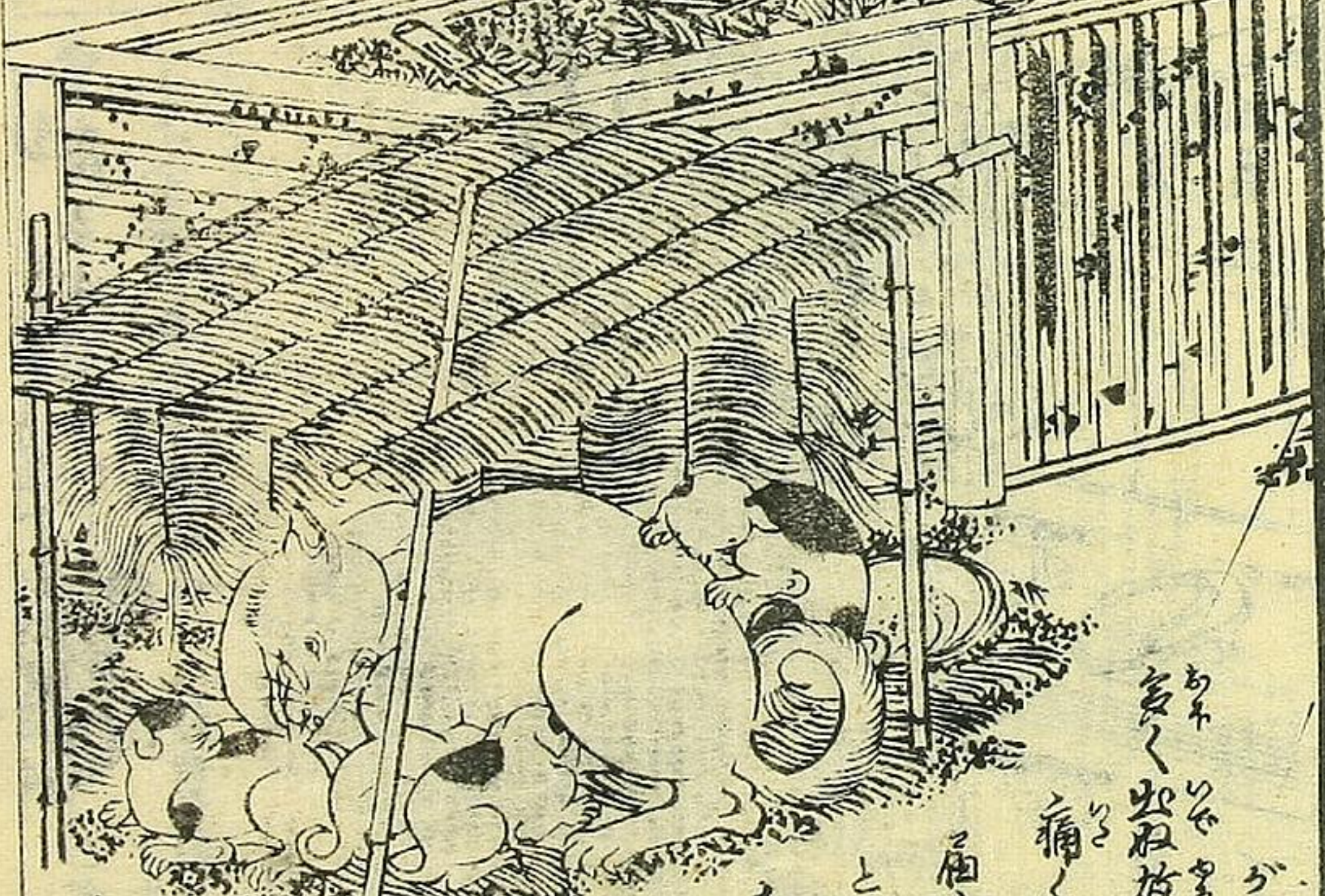
〇徳門の勢い盛んなる、
はら、はら、はら、
加勢、加勢、加勢、
の、の、の、
東、東、東、
上、上、上、
昔、昔、昔、
と、と、と、
の、の、の、

つぎに... 男児と授け... 女婦



夏中... 七夜に... 肥土

◎か... 一心... 験... 女... 男児...



か... 痛く... 二... 月... 先... 情...

又「多ふゆふ」とも「多ふ」の
 中「ゆふ」は「清」とも「明」とも
 亦「定業」の徳と「正」とも
 あらんと

口ふの心と
 空を空と
 先の空と
 ありせばい
 空

見ざるは
 如何に森とひあはれ
 然るもあるありと
 之れをまてすとあり



けがの固果を「腹め」とも「男め」とも
 一の空を空と
 乳児を抱へてと途方あり

古の持も空と
 身不空と
 あられと空

する空甲斐と
 後を空乳育と
 聖児の空

歎きと空
 形て空手事と
 湧と空式と
 任懸と空





去るべき
任むと構ねて
あはれさるれい
せぬ多しゆな
産の内い
ゆふとゆく
存の湯物と
多量と求め
乳児と持る
家々へ標と
屋ゆれね
ゆと乳と若めて日の内
ごうやうはさぬやうすれど

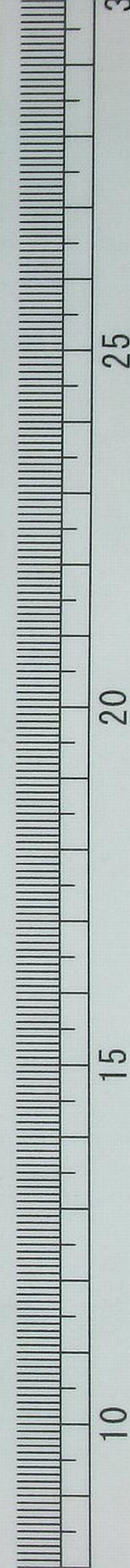
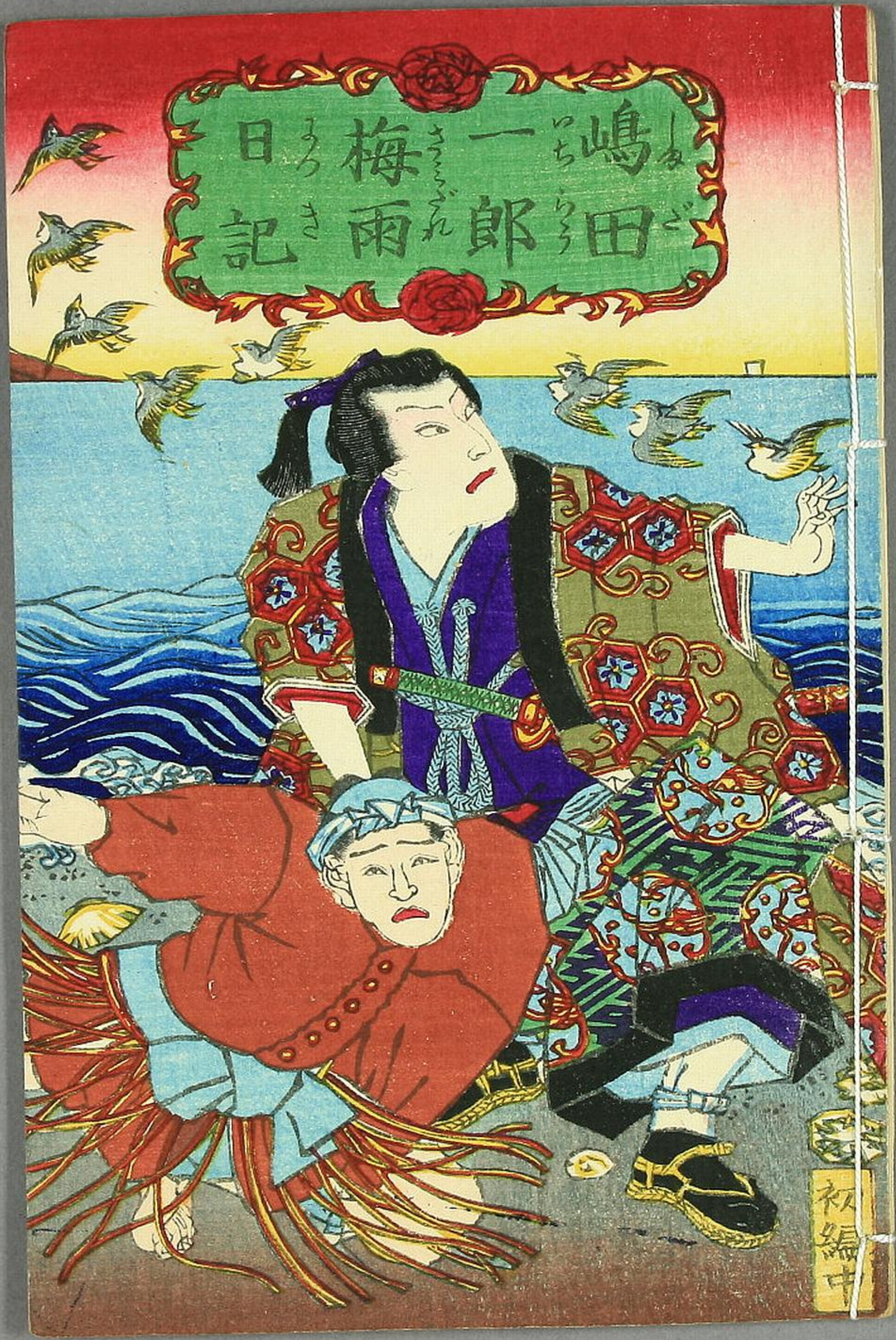
△養育世がまの種とま
ゆるのて産見らるいん方
後さねらるぬ
事とりの乳母定
自方の方で訓係
せと男の方へなり
ちるつあけは
あねがまご十たに
ゆの乳のきつる
困り毎日
櫛つて持
るあいら
打相成



後ゆへも心と置き構ねた
行へお尋幸への腹者へ聖児の
まむの然のたまへ
産後へ入る
お物後世の
赤浦久と出
生事と知ら
きうり親切なる
なまある
小二番始の
お後とのか
不心候は縁で
武家の成人と

① 凡と布一は何よりて
年高か永六年の妻
の末は女々と男の児と
れと取むか
連て来
て下さ
あま
和見と
らぬかゆに
そらあ
まむの遠
目どうを遠
如久と妻の云々の地獄で仏性
皆かゆの置らるるまを米入
泳くおとび生目ら一弁を抱て
ハ久と妻方(通以)か
先の家内へ寄らて(次へ)





10

15

20

25

30

寫田一郎

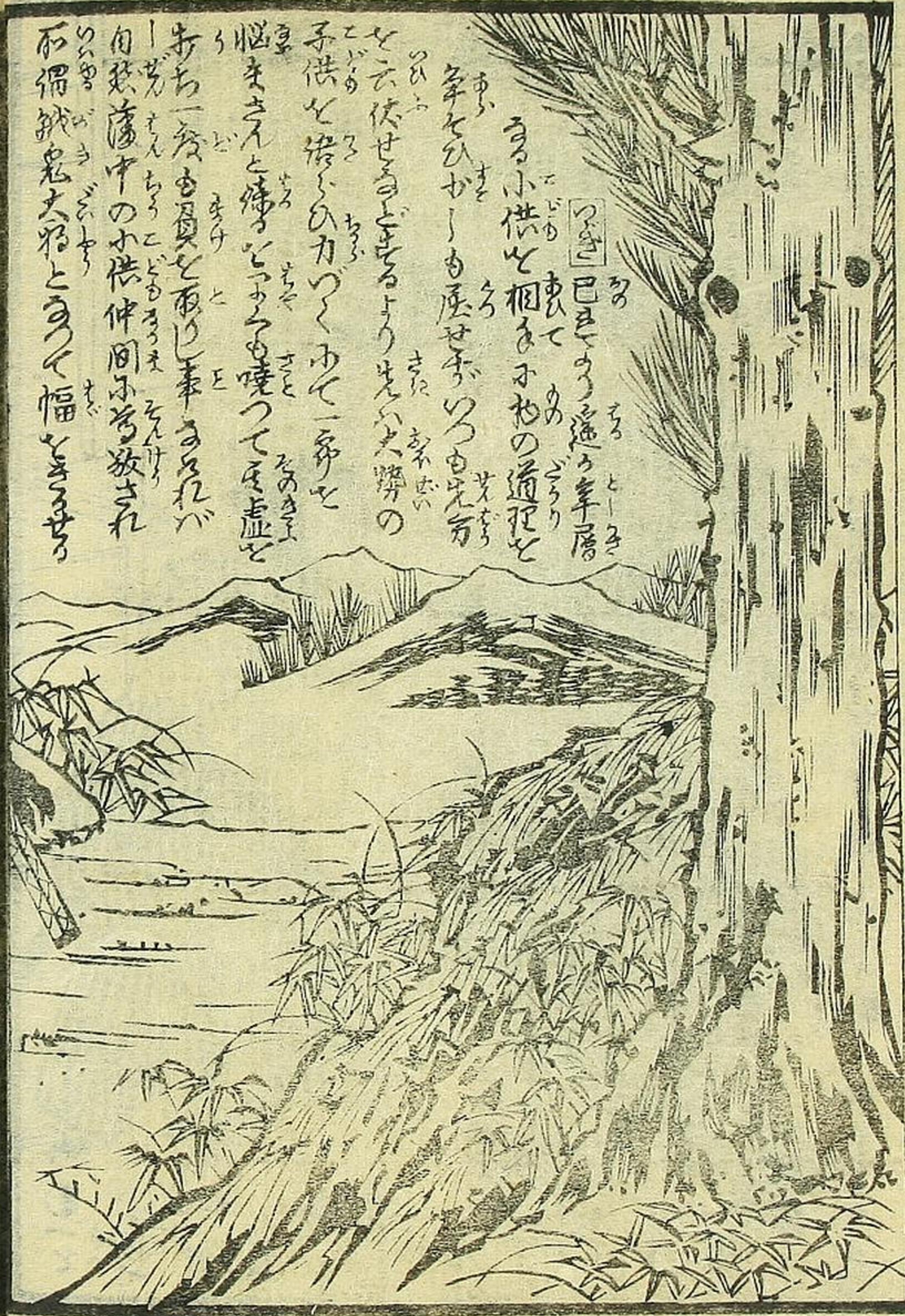
梅雨日記

初編中の巻

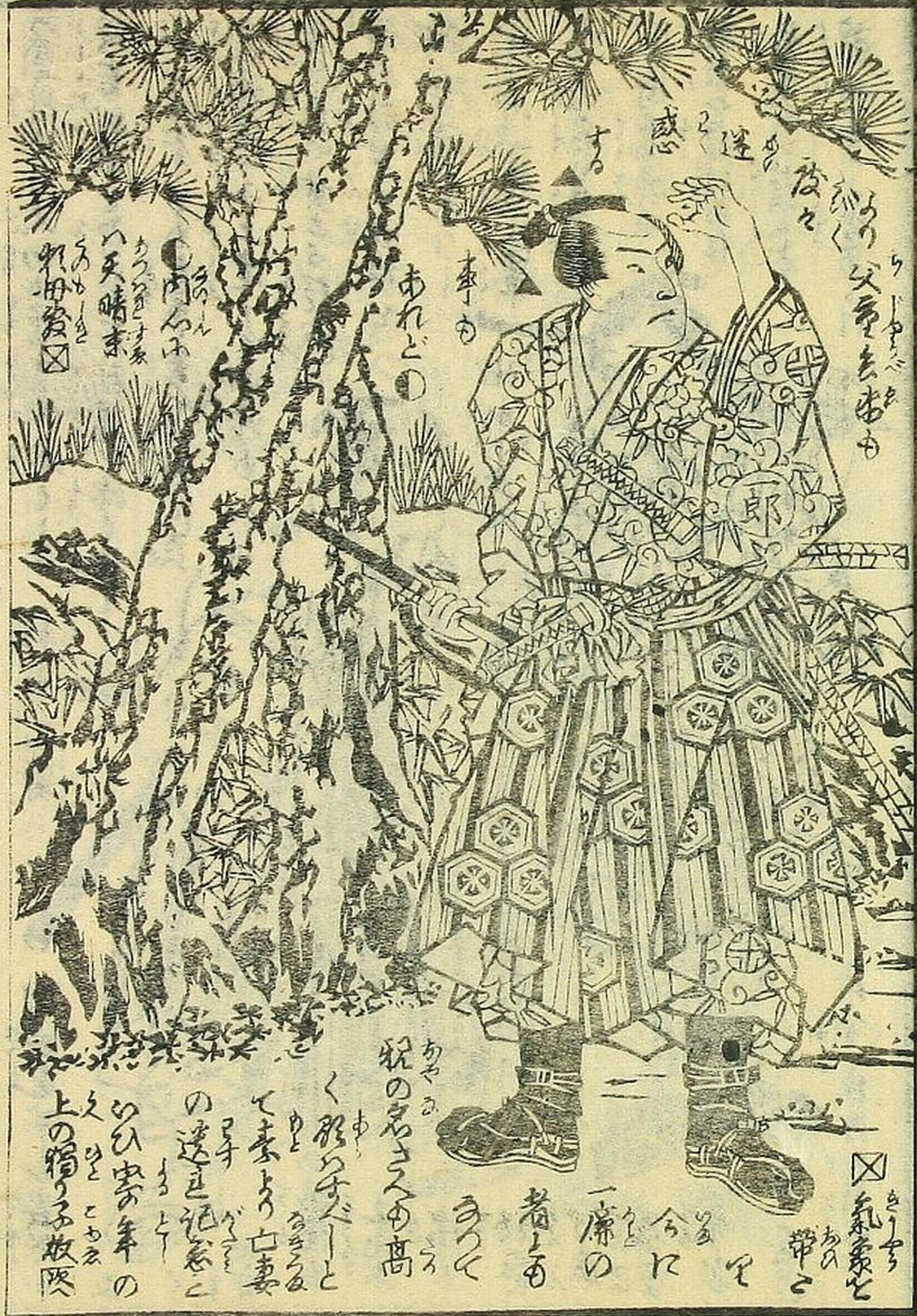
芳川春清園
園本起泉張
撰高房種画



48-5186



已きとう通う年層
 小供と相まふ初の道程と
 年をひかりも履せよのりも先方
 せと伏せるよきより先の大勝の
 子供と倍々の力つゝゆて二弟と
 悩まさんと侍とふも嘆つては虚と
 赤あ一袋も負と取り奉らなれば
 自残漢中の小供仲間も放され
 石備然鬼大船とふつて福とせむ



父を去る
 感
 本
 あれど
 内
 天晴
 母

氣象と
 帯
 今に
 一席の
 者よ
 みる
 祝の名さへの高
 く祝ひと
 て妻より亡妻
 の遠近記憶
 の以家年の
 上の宿る故

大切の書音の甲より
 後書公卿とある世に刻道と添く好
 一時の他事とも忘るるまで承勅に
 其御速うの上達してを師の
 其と著て愛する程感か
 徳川が御家不政務と
 朝廷へ上あり
 より御一新の改革
 あり夫を華後と
 江戸幕府の
 制法を設けられ
 是まの幕府を
 藩知事と定むられ



此木小次郎

杉本乙菊

練電せしが裁切也

事とまじ
 公今も及及も用色と

東京にあり各藩の
 各藩と引取し事
 あり江戸の治
 の六月甲て一第が
 十五第のと死
 あり一第へ又
 事とまじに
 伴ありは
 加丹全
 作(後)
 位ありは
 維新の際
 世間の様なる



服田功一

杉村文一

是より学問のそと

さいざうよりまじりの時の
 用ふと益々剣道修行の
 出精し兵備のたに花物と也

明治四年の夏五月
 以て懐く頼及小外出
 由るに依然に居し
 果する或田の事次
 かりきる快晴と

次へ



海の子

の声も聞かぬれば
心頻りに慕ふ
さても
方南
霧が
影方
と遮
きり
さうぞ
からぬ
のころ
のころ



日影の暮
とをの今
たぬ
小春
とど
獲て
慰ま
とめ
と

山の利を
○摘み
○おしきぬ
おもしろ
より杖を志す
峰下を立歩
谷と杖一尚奥
山上の麓を
あらく入るが
あつた
獲の位は夏も
あが上生
あまの
あまの
あまの

道と尋ねても
折の音死
人の迷ひ
定めんと
松枝と
け言と
細枝と
あまの
あまの
あまの
あまの
あまの

方

四

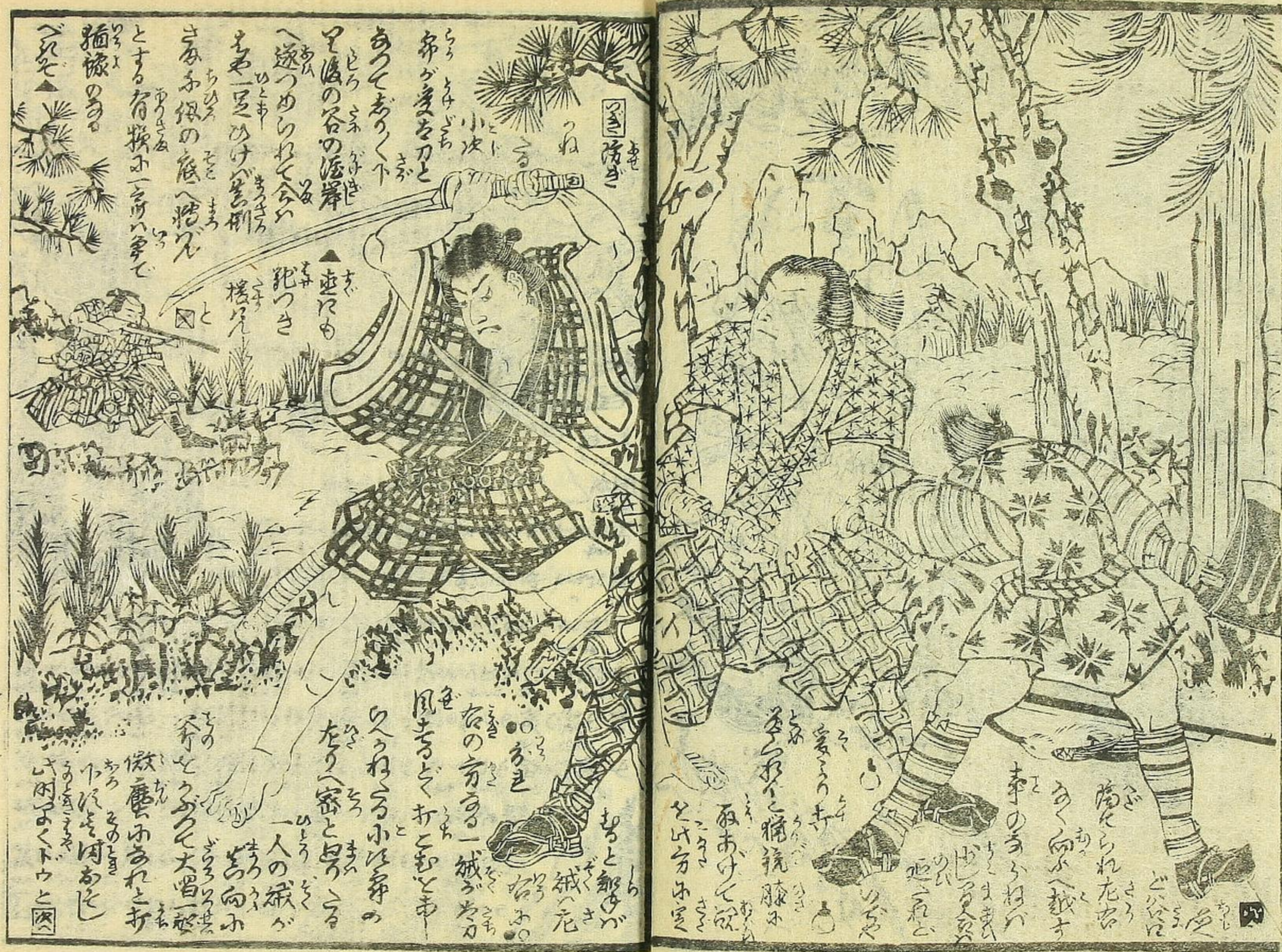
つき 腰打の
安んそわの松の
空しく笑へしき 徳も
極り松や海に松んと
さる河のつれとも
方南のつれとも
下々つれと切
徳の剣の母方の
耳通し 細小の
つれとも 松のつれと
と 巖のつれとも 松のつれと
つれとも 松のつれと
つれとも 松のつれと
つれとも 松のつれと



三万と云ふ松の嶺を
長家の部愛ゆへ倍
臣あつちよ三万石の縁
と合むは亦金十萬が
一子小公命とを統より
僅々二つむり奉り上る
若然もて優服されし国に
わさる松の嶺を統より
あれど何と云ふ相合の二人
跡小公命を統よりの大の男が
かきけりて松
松の力を



の松をさへ
下す
刀と松と
松の力を



小波

あつてありくと

そ後の谷の浮岸

へ逆つめられて命の

ちひや

さあふねの底へ踏ん

とす者換ふとすの事

挿像あり

ざれそ

ちと都の

織の

夜の方の一城を

風と打と打と

夕のねらふ小は

左の八密と

一人の城

茶でうらぐ大唱

微塵のあられ

下は

かた

け

車の方

の

ま

の

の

の

の

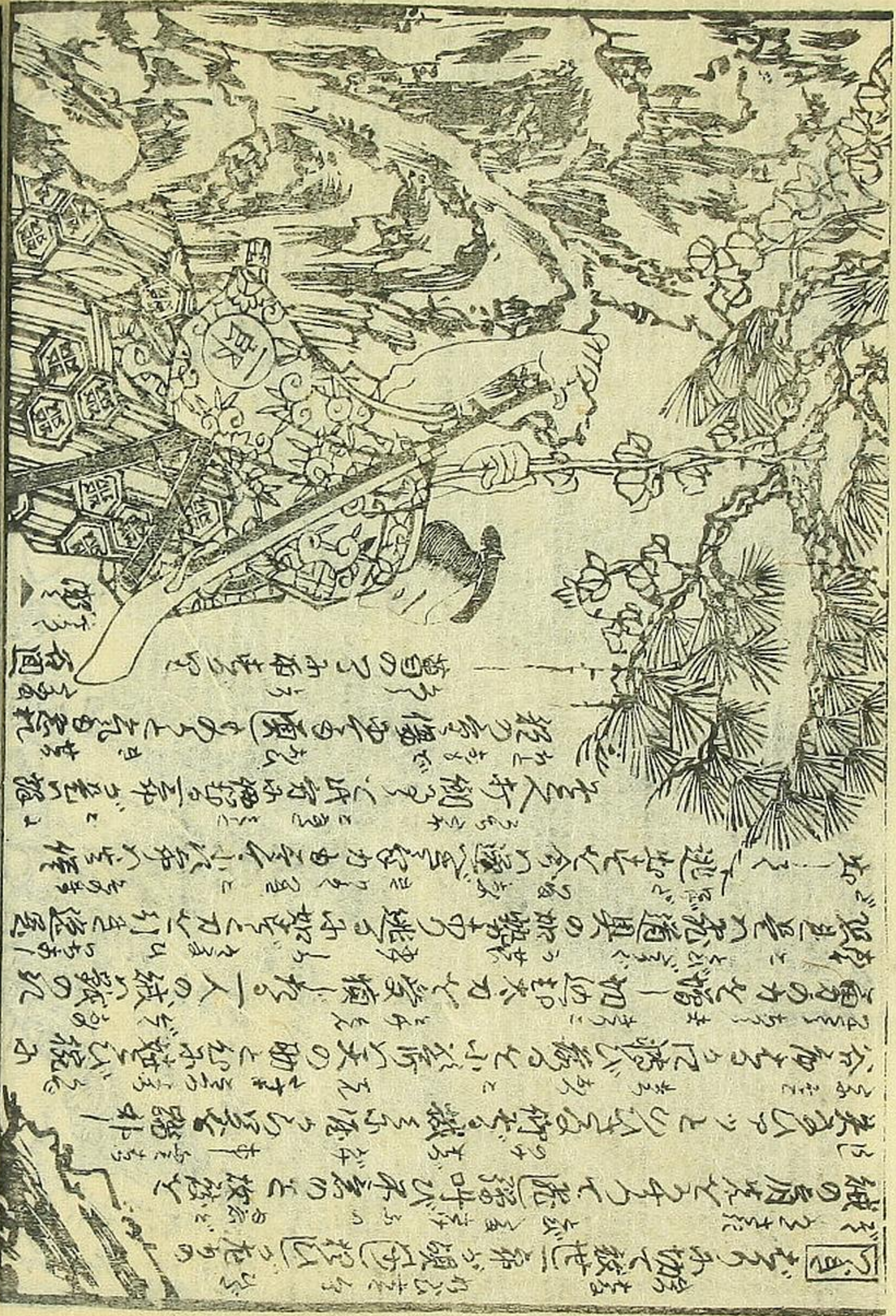
の

の

の

の

の

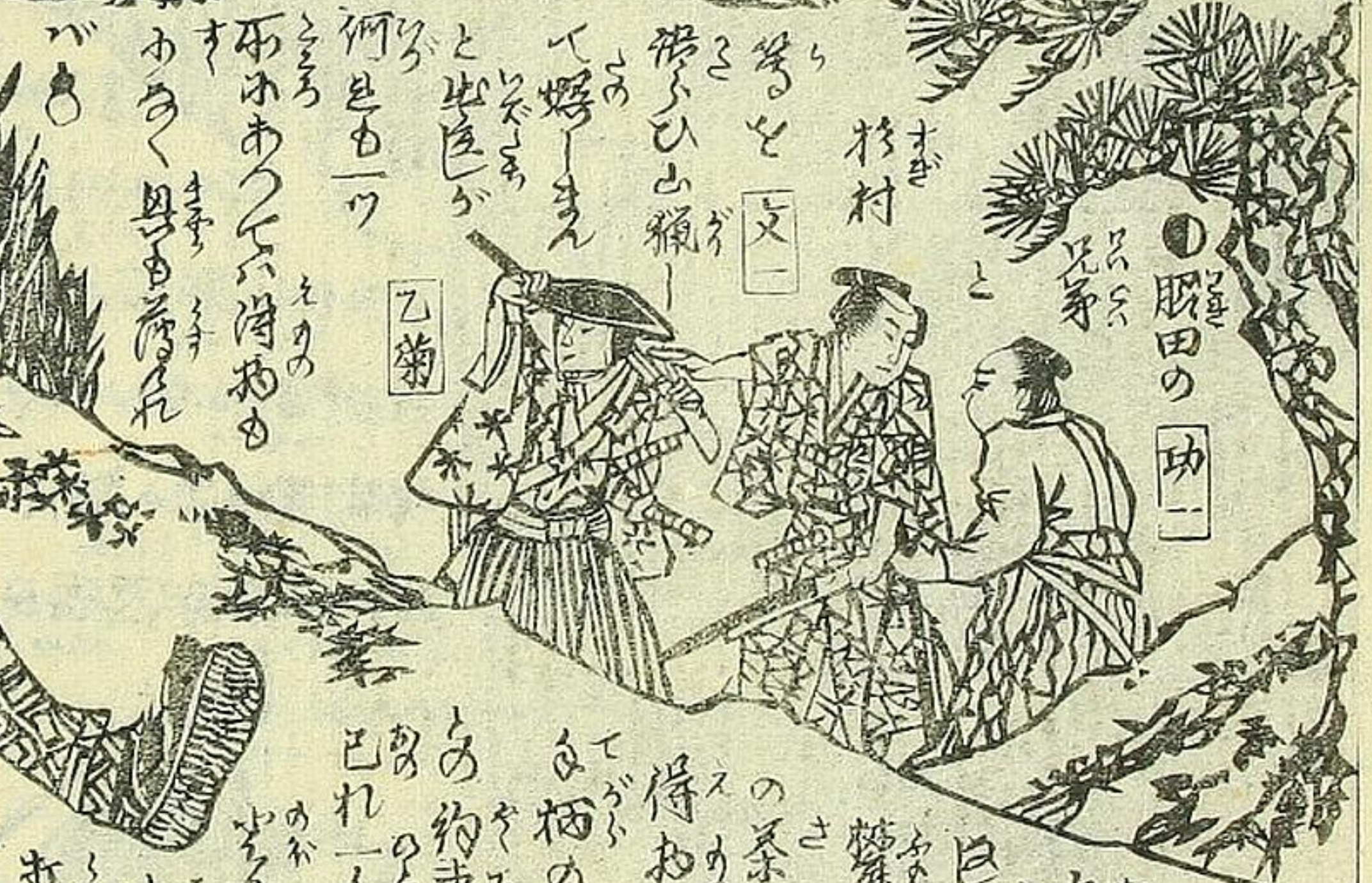


福に
 根原箱之形
 小向い後り木の
 のまご足向母ま
 上輝りて回世之
 由越以去城之
 中至之先



然り
 其の腰者飄本候
 其様子の足れ世
 上一左の備之受
 前休之可也
 身之た選
 道小本
 此所遠以
 此所遠以

水とこれのいふ合ん
 七小川の類小吹つけ水
 若上織一既中逃去うれを
 けう小あぬと二声三声身
 よみ淵を腰と押開き一身の類
 と不思議さうふ打眺め
 一帝若ゆてありらるる物屋今
 拙共さ居急と故これる由
 願事さ承けはと蒙るれと
 述べて物い小縁
 松若偶々の
 好天ならに
 今日約まが死



河はも一ワ
 乙菊
 村
 腰田の功
 得おの多少と比べ
 白正年と合意に
 繁多孫を傍村
 の茶店小舎一七
 小香二三羽
 折と海対しと



大いろう丸
 せま
 小香二三羽
 折と海対しと







櫻齋房種画

岡本勘造綴

島鮮堂壽梓

初編下



10

15

20

25

30



日記
初之書
下の
本
この書
門閣
その書

高嶺堂文種

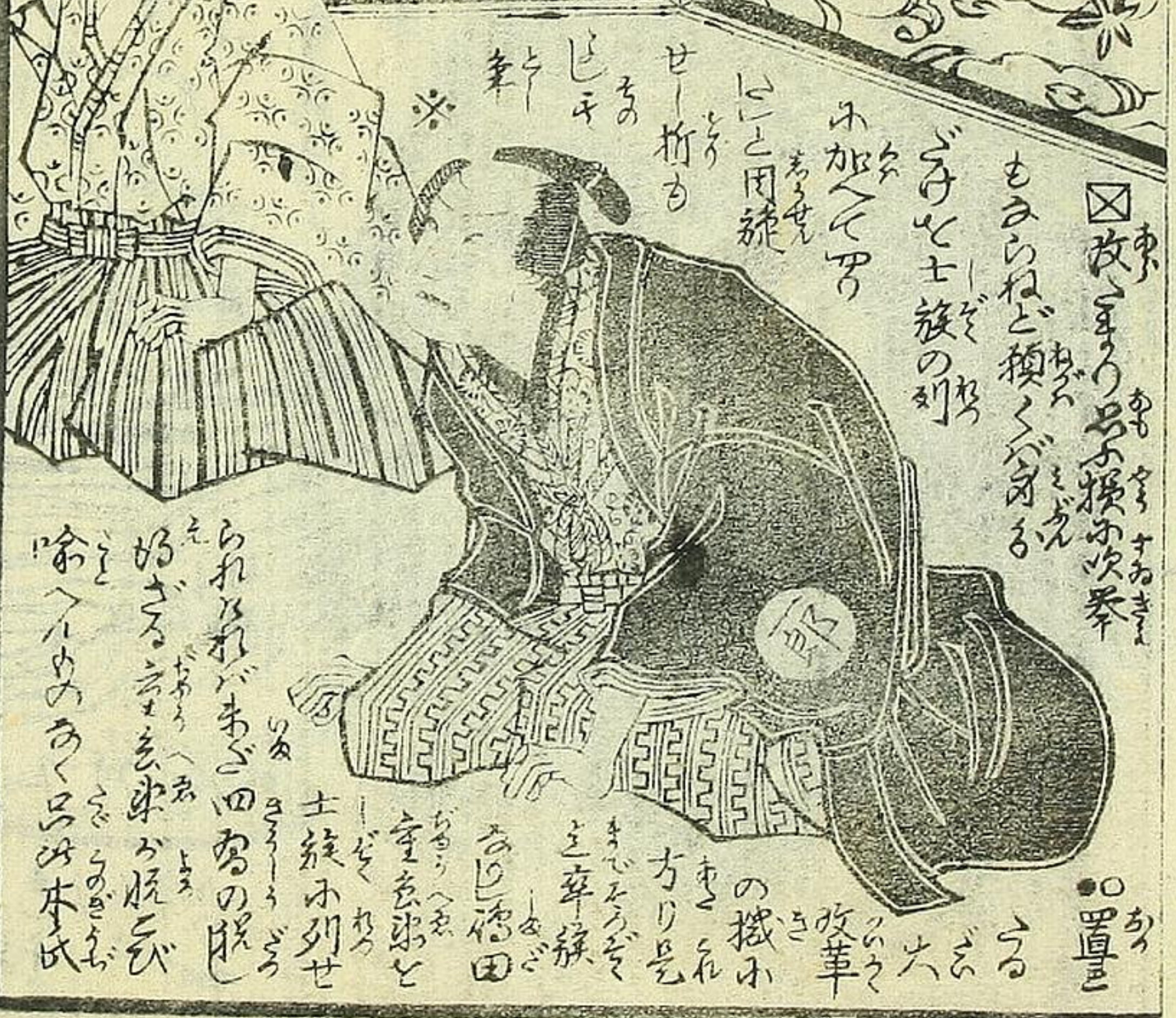
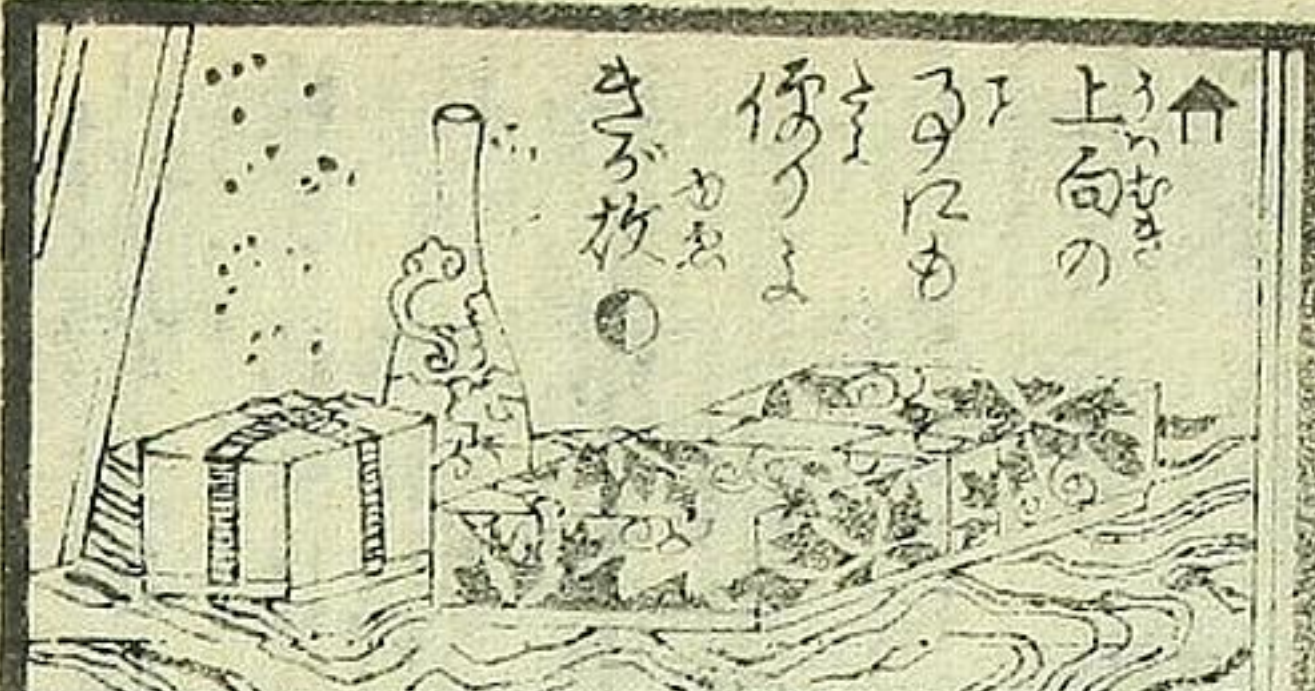


○柳々本小糸糸の人と有りて身居るに幼女の
頃より利登はて神童と稱へて
後にては或人が幼幼かはて氷帝に
敏を考ゆ申幸小糸の却て暗居るありのまつ
ゆいしと小糸糸が安妙ゆめ着しと事
ありては幸あり
幼女の因字ありて
伶俐あり世
ありんと即ち小糸
ゆいしと人ありと事ありと事あり
その才氣に成世しとの不道なる長
き小糸の父令十糸も教育
小心をせしる成道なる事ありと事あり

高日刀下

48-8167

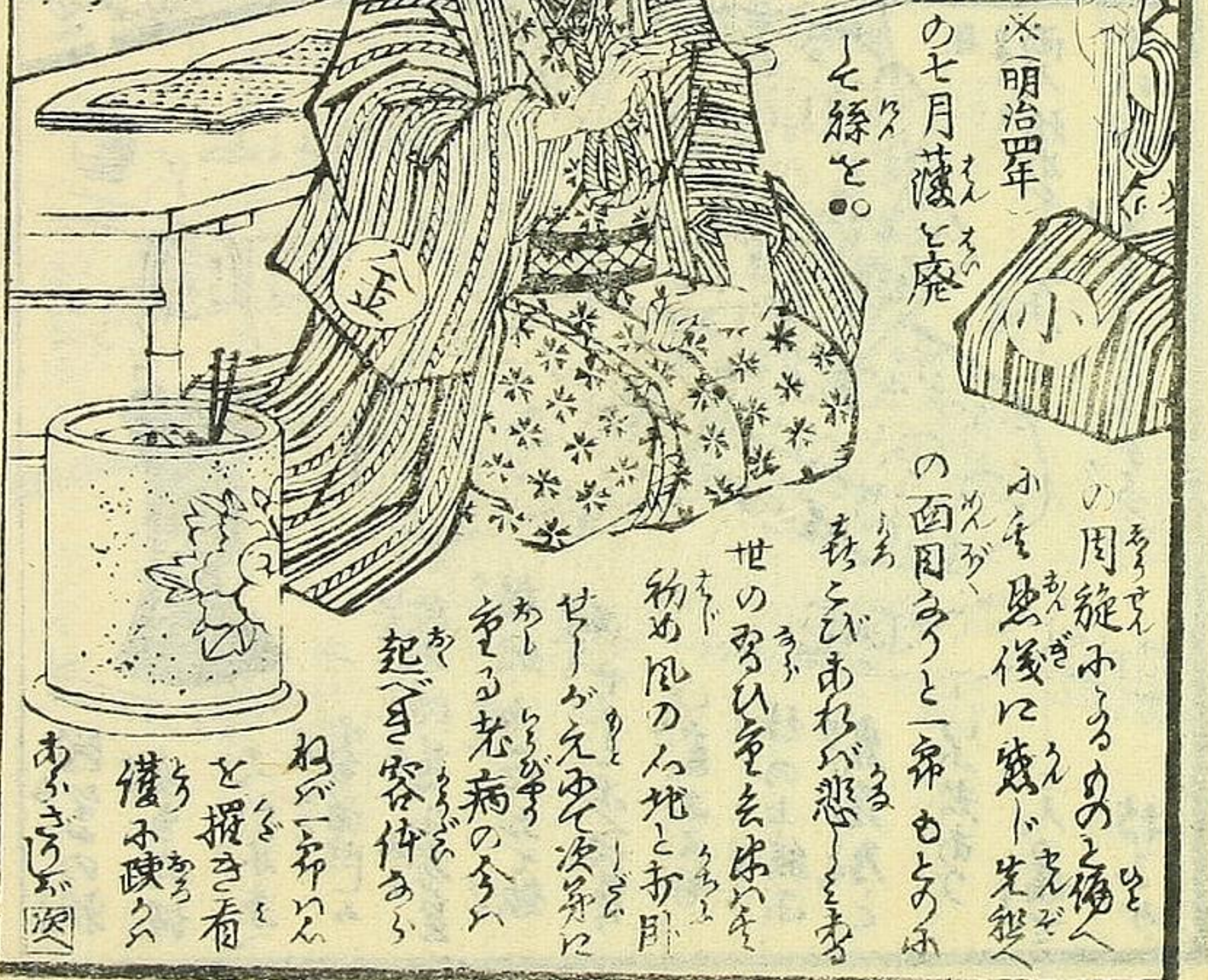
48-8167



ついでに後で
殊小の家
除光もあ
かしく

改まるの
もみねと頼
ごみと士族の列
小加へて
にと用統
せし折も
新

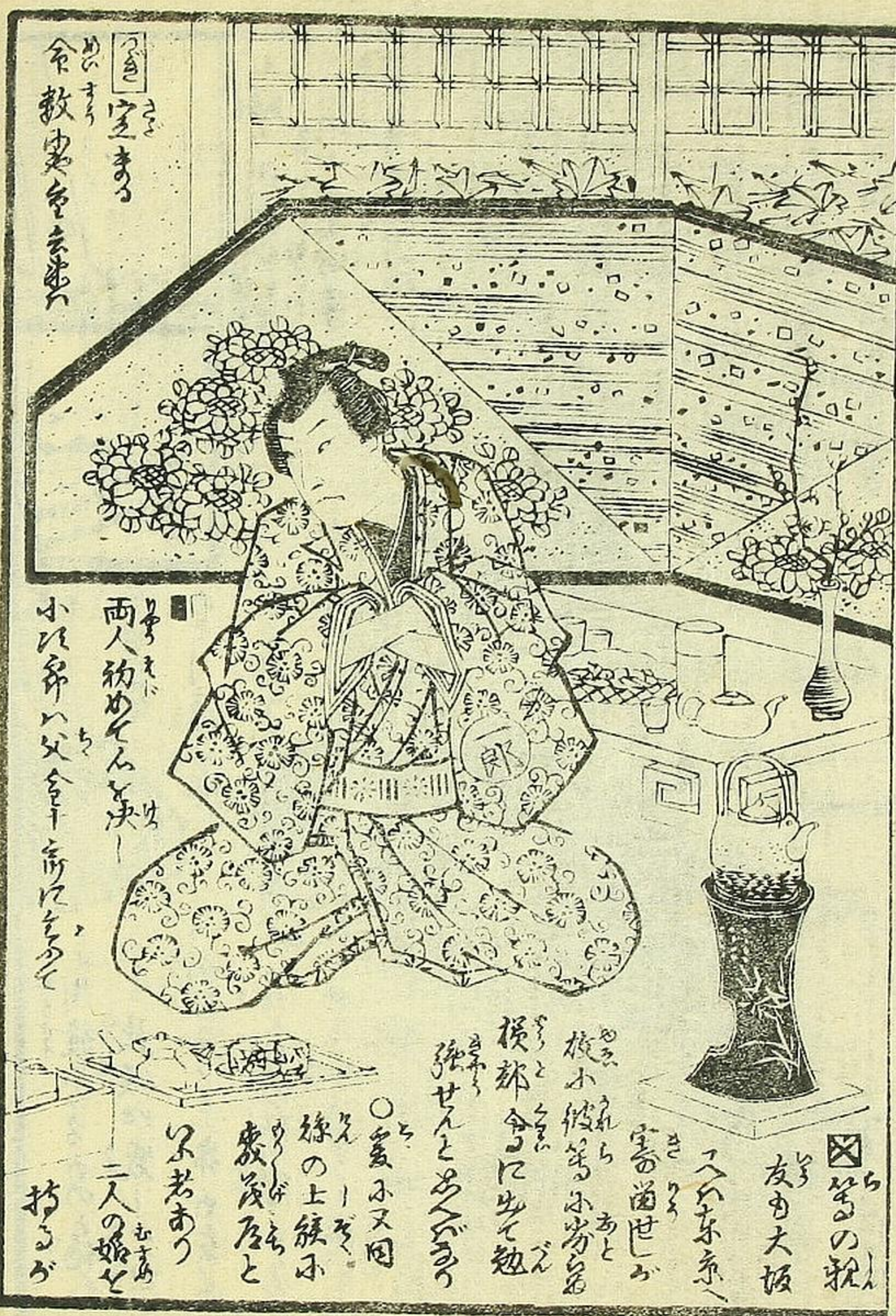
の撰小
方り是
と卒族
まじ徳田
重玄流と
士族小列せ
られれば
好さる
味へる
味へる
味へる



顛り小糸と引えん
と心掛ぬるが万事
舊幕の終とい

明治四年
の七月
と縁と

の周旋ふるもの
小を恩後に感
の面因うと一糸
世のついでに
初め風のん地と
甘んがえ
重る老病の今
起る容体
ねがひ
と撰き看
儘小疎
あふさ



命教由來を去る

二人初めんと決
小次郎の父金十郎はさうで

○愛小又同
縁の上候小
敷後屋と
いふおあり
二人の娘を
持るが

友も大坂
つへに東系
宝島世に
板小彼等小次郎
横林合に出来勉
強せんといふ

六十一と初止て又来る
妻も清に生奉の冬の末
吏あくたのしるふ一帯の端め
かねたる候せ行ふ小次郎
第も方の如く七日の回席
いとも怒ろふ漸く意あも
いふ果てたれが今も父母
とて世に存さねいさく繁華
の身系へ頼むき兼て志願の
学文を修行して智識を深め
事を成さんと志いふ先を奉
と小次郎小打めしるに小次郎も
疾うそ志ありとの事には

今以て故人か行く
出系と思ひまよも
畢竟いふところにて
舊国は遠の若お共い
甲乙とよく故郷を立
去り既小松村松田

姉を交
ふとよび
妹の後子とて
まよふやうに
と越せしむり
あるかして如い
双方の親を
相澄してまの
小次郎に妻の
せんと縁約せし
中もと後子に疾小
悦ふ同小つけは也
うと兼てふ小次郎へ

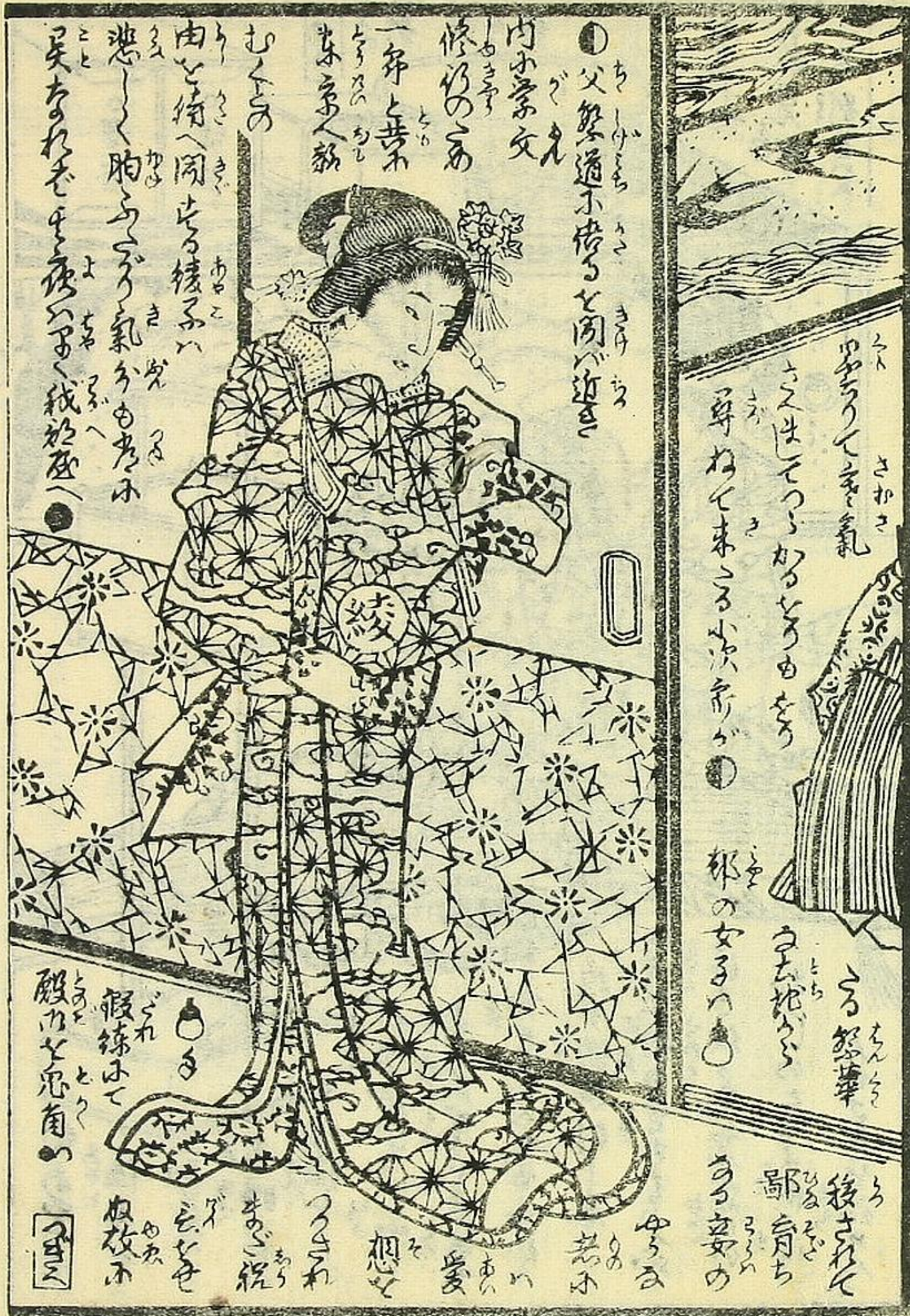


くちくち
かたかた
かたかた

合のしほり
あそびのしほり
あそびのしほり
あそびのしほり
あそびのしほり

●引籠りおひ座しとんの内兼
てふりあかまとおむる部のおね
あかまとおむる部のおね
あかまとおむる部のおね
あかまとおむる部のおね
あかまとおむる部のおね

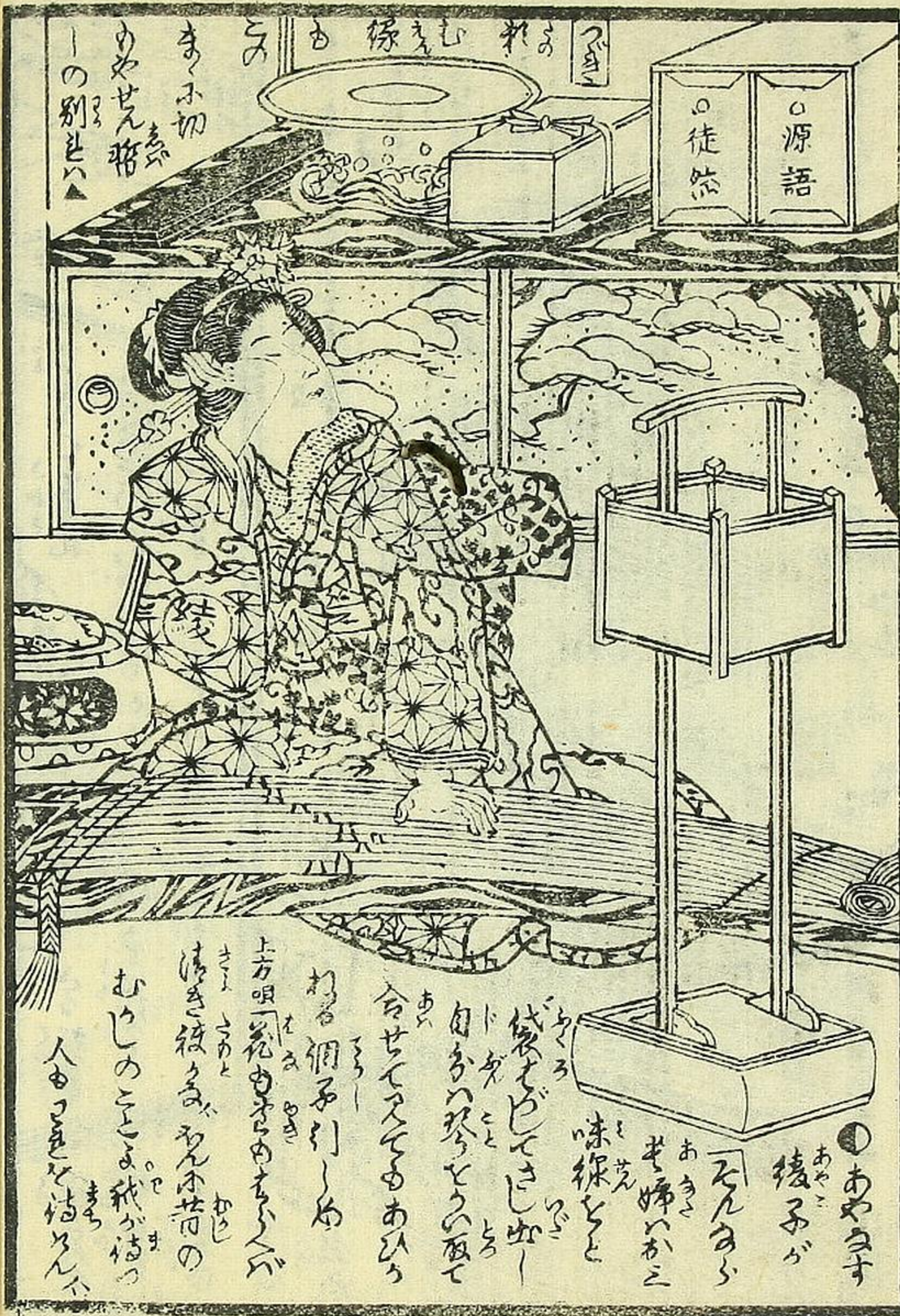
あの上り
あの上り
あの上り
あの上り
あの上り



●父娘通不傳とて因は近き
内小宗文
修治のあ
一弁と母不
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ

あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ

あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ
あそびのあ



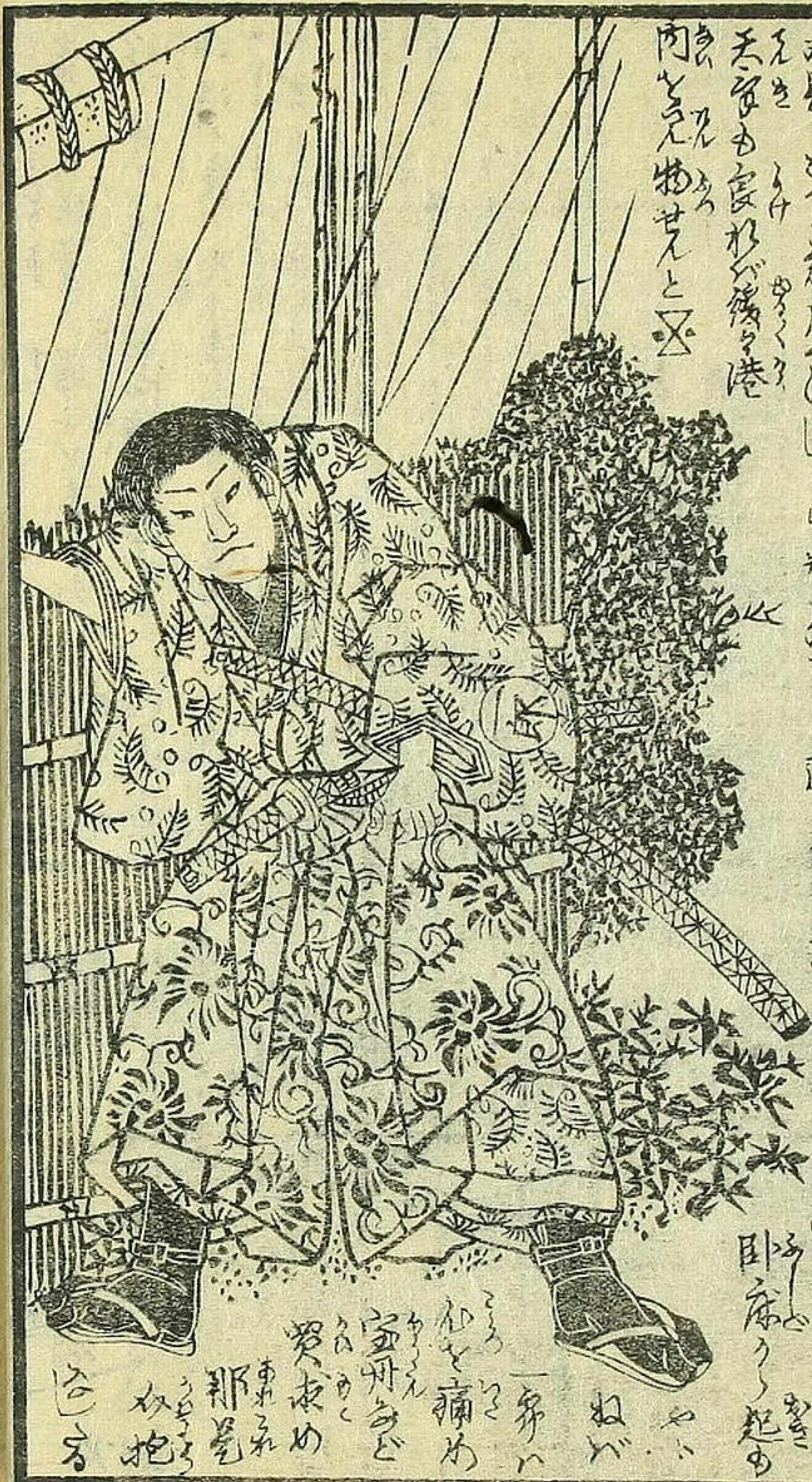
まふ切
ゆめせん
の別



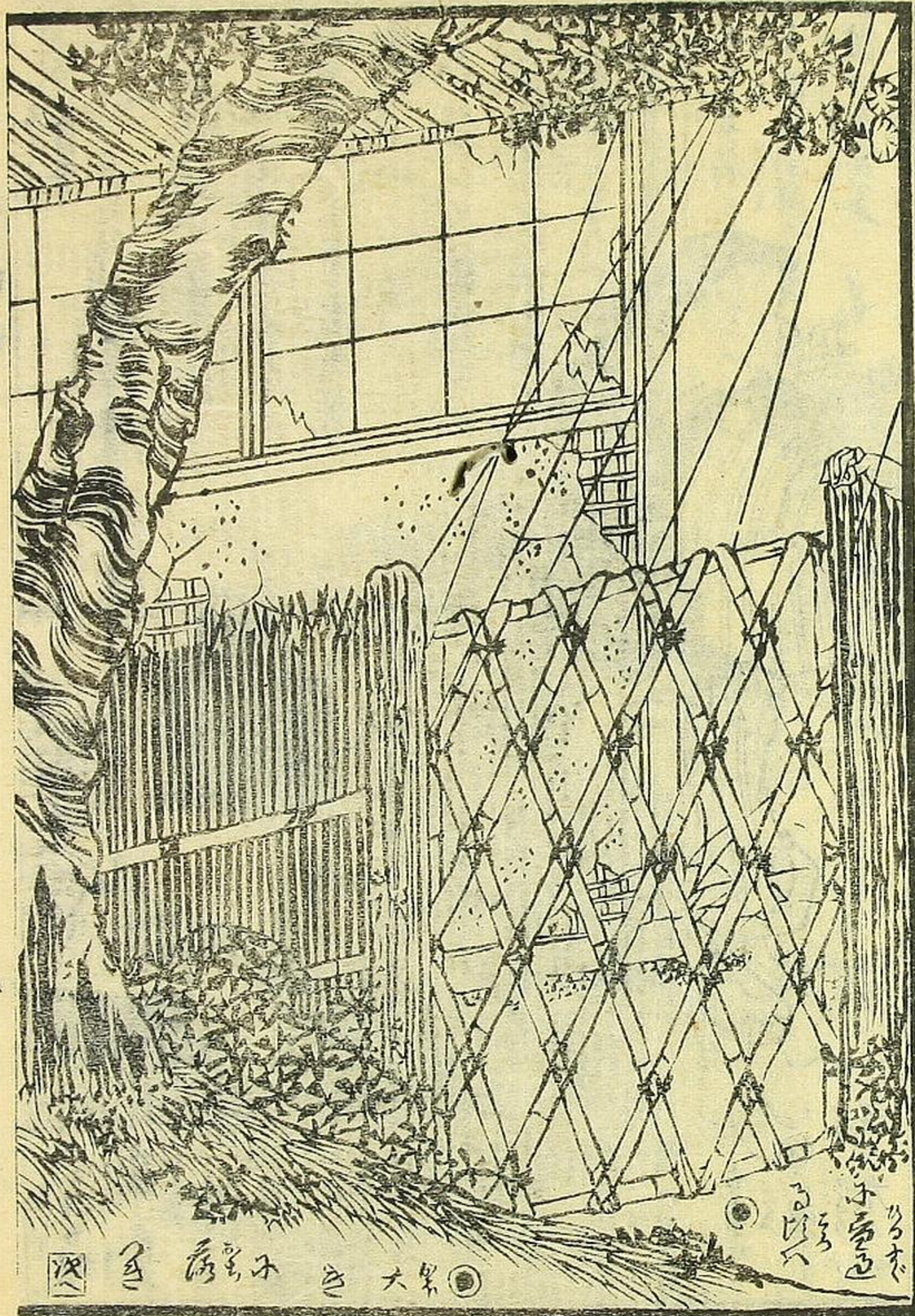
鳥田神下

五

公方乃名布と稱し日数をねて漸々と得る歩み
 又復たせし小次布の長途の
 横濱一尾一四五町迄出てお糸せんと毎夫通二丁目の
 疲色供しまた大地の意し
 丸屋とひらげ店へゆりしが生理好一布の味く起すや
 水申りゆらん地つらりと
 天守も良杉の傍り港
 内と見物せんと△



ぬい
 一布ハ
 ぬを痛め
 宝舟まで
 買取め
 那是
 ぬ抱
 迄方

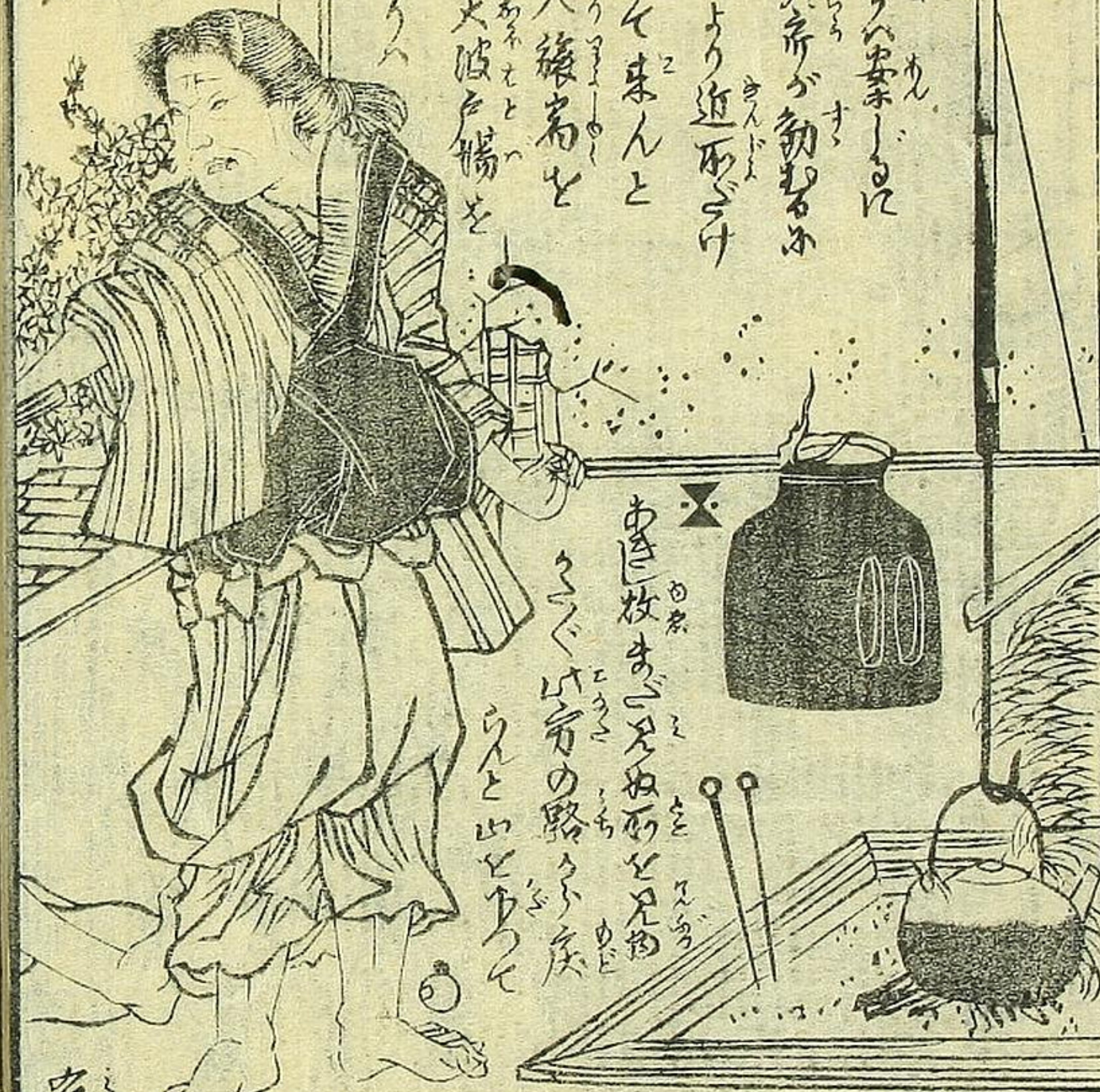


大繁
 子
 〇

つき 合意事

さふゆ
出来これば今うの案しに
及りぬとて小次郎が初習ふ
任せされば是より道取ぢ
あての足おしと来んと
一帝の只一人縁若と
立出で見ゆ大波を揚を
一見してまはるの

西の東の
白波の西澤
波の立登り

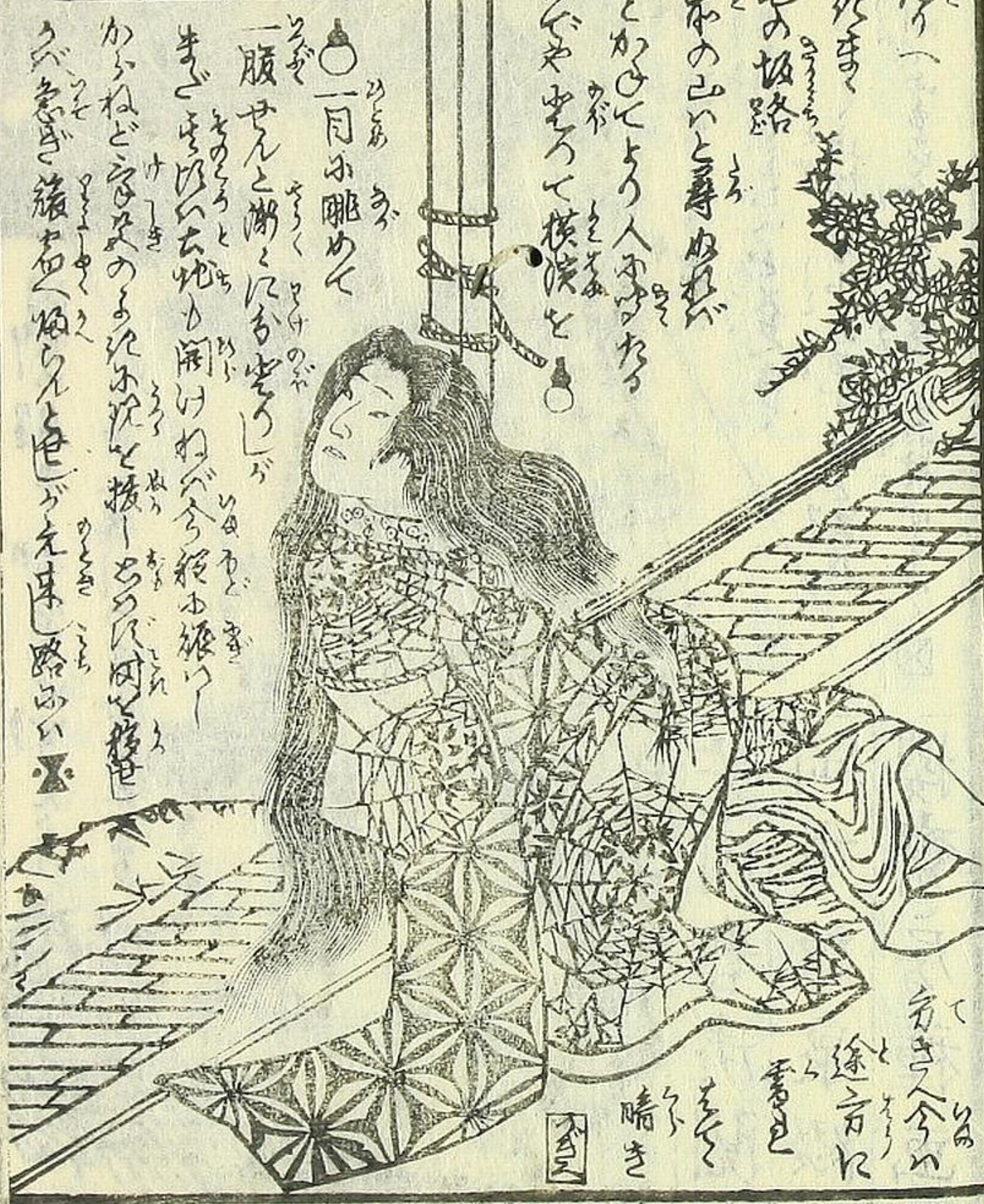


おぼけまごえぬあど見物
さぐり方の路々度
うんと山とわつて

の若も初
ぬ淋一糸五
と八合の田
脚由西一
こちとさ
ふおし
白時みらぬ
成るさ
踏くらま
夢の和念
ゆあり
悲し
有る方

湖と若やなり
曲り珍らしめま
うらくと舞毛の路路
お城へて彼下の山いと尋ぬね
仔細山あつとわびてより人あつた
眺を絶倫の心をせりて横濱と

此所と次の
画解二編
はと分る時
あつた



一月お眺め
一腹せんと湖に空ろしが
まごほひの大地に開けねば今終お娘
かかぬと字及のよはみだを扱一あつた
急ぎ後をぬらんと世が元来路あり

行き入今
途方に
晴き



高尾明治十二年六月二日

○此の身より青かきりて
○并二編引つる山女仕立

合流之程

高尾のまきり
 のどほりあし路と路と
 高尾のまきり
 のどほりあし路と路と
 高尾のまきり
 のどほりあし路と路と
 高尾のまきり
 のどほりあし路と路と

芳川春涛
 岡本起泉
 櫻齋房種画

東京區分繪圖全 虫兒島紀事 六冊

命之養生善惡鏡全 島田郎梅兩日記 五編 大尾

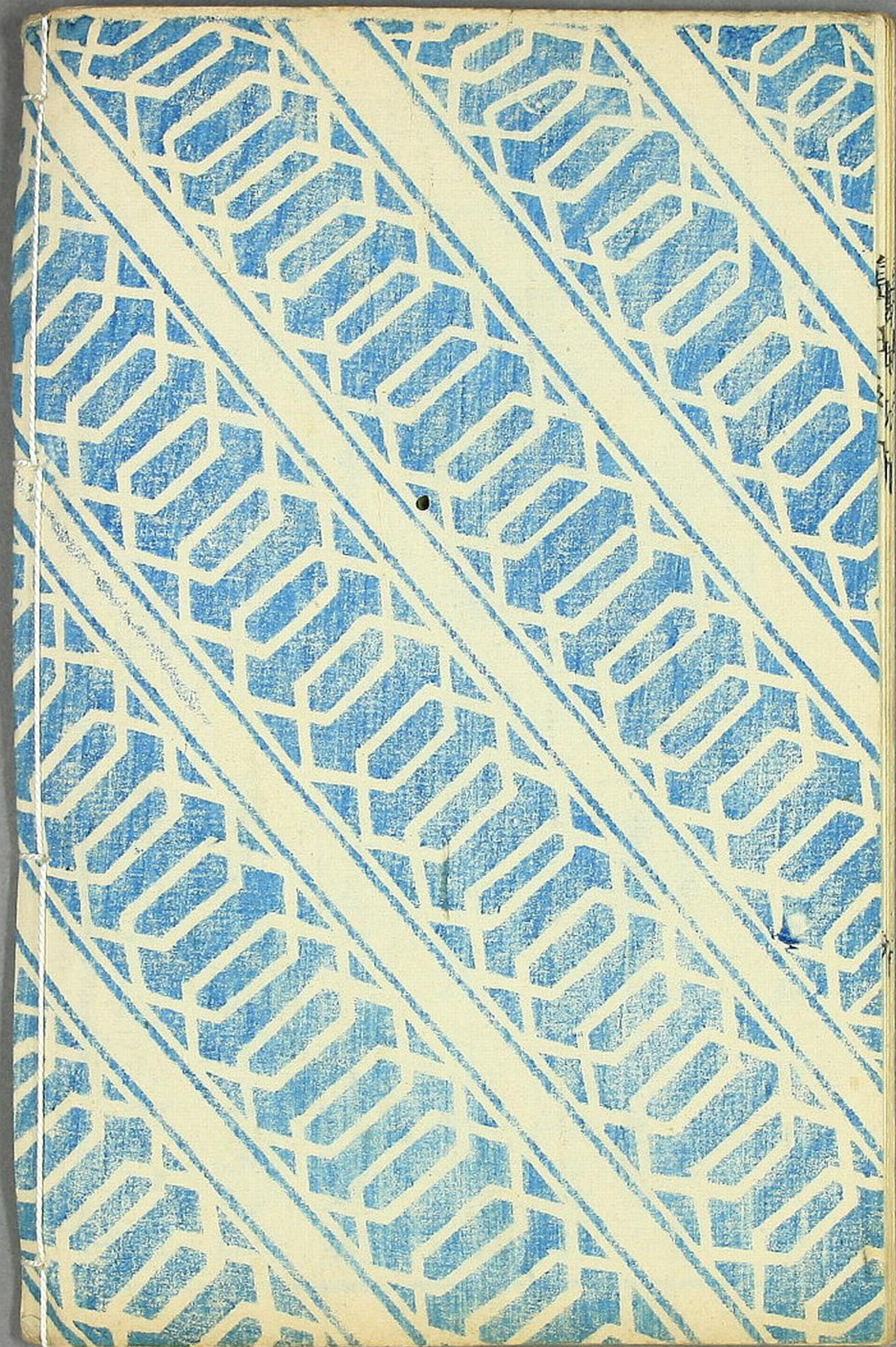
其名の高橋 東京奇聞 秘編 出版 粉色入小本 數品

御所櫻梅松録 十五編 仇優忠臣藏折本

大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々

龜地本問屋
 編輯人 岡本勸造
 淺草區瓦町十二番地
 出版人 網島龜吉

010190511079



島田一郎梅兩日記 茅初編

志士のいぢり
日記の
初編

芳川春濤校閱

岡本起泉編輯

櫻齋房種圖書

島鮮堂壽梓

島鮮堂

